

多率寺たそるさにて

新井 宏

四年半前の『まんじ』八十一号に書いたものを再掲するにはわけがある。

その日生まれた孫・富取泰治とその弟・新太が、今では我が家の話題の過半を占める。五年間うつ病に悩んだ弟も、奇跡的ともいえるほど回復し、活躍している。障害を持つ我が子・武もゆっくりではあるが自立心を高め、元気に働いている。

悲しいこともあったが、その間の韓国通いによって、私の趣味・歴史や考古学の研究も望外に進展した。

『まんじ』に小説を書くという課題はまだ実現していないが、一度も休むことなく書きつづけている。

学生たちとの交流が楽しい韓国慶尚大学には、もう少し通ってみようと思っているが、韓国生活を始めたころに書いたこの「多率寺」には、それらの起点となったような懐かしさを覚える。

韓国に来てからというものの、多少むきになって、海印寺、通度寺、松広寺、梵魚寺、隻谿寺など慶尚南道の有名な古寺を歩き回っている。いずれも溪谷の奥まった森林の中にあり、その薄暗さの中で、伽藍部だけがスポットライトをあげたかのように輝いていて、散策を兼ねた「古寺巡礼」には好適である。

もっとも、この地方の寺院は、たいてい壬辰倭乱（文祿慶長の役）の時に一たん廃墟と化しており、比較的に新しいものしか残っていない。しかも戦禍の疲弊を物語るかのように、建物には粗末な木材が使用されており、それらが青、赤、黄、緑などの原色で豪華に装われているのを見ると、多少の興ざめは否めない。かえって、荒廃と調和させてしまった方が、日本的感覚では面白いがあるのではなからうか。

しかし一般に、これらの古寺は今もしっかり生きていくかのように思えた。売店では、約束事かのように読経のテープを流しており、本堂では多くの信者たちが立伏礼を繰返していた。たしかに観光化の流れが押し寄せてきてはいるが、それでも信仰の場や生活の場としての第一義的な意味は失っていないように見受ける。あるいはそのためにこそ、鮮やかな彩りが必要とされているのかも知れない。勝手な感想は慎まなければなるまい。

六月六日（水）は韓国の顕忠日。休日なので、晋州市から西三十キロのところにある多率寺に出かけることにした。隻谿寺とともに中国から初めて茶が入ってきたところで、般若茶の故郷とも言われている寺である。茶道を趣味としている妻と、共通の話題にできるかと思うと心が弾む。

異国に離れて生活していると、そんな工夫もふたりを近づける。

地図で調べると、列車なら行けそうである。列車の時間がわからないが、いつもの登山帽に古びたザックのスタイルでとにかく晋州駅に向う。

たまたま一時間位待てば八時半の列車があるという。多率寺駅に止まるのは、一日に三本しかないというのだから、全くついていたと言わなければならない。駅の周辺を散歩しながら時間をつぶす。もちろん列車で行くのは初めてである。料金はわずか千百ウォン（約百円）。

普通ならどこに行くのにもバスを使う。安いし、近郊都市間のバスでさえも大体は十分間隔で運行しているからである。自動車の普及と共に近代化が始まった韓国では、鉄道の近代化を完全に素通りしてしまった。いくら国策としてバスよりも安い料金を設定しても、一日数列車ではどうにもならない。ソウルと釜山の間には新幹線を建設中であるが、はたしてバスに対抗できるのであろうか。そんな議論が韓国でも持ち上がっているという。

三十分ほどで多率寺駅に到着したが、降りたのは三人だけ。もちろん無人駅である。帰りの列車を確かめると一時間後に一本あるが、それにはとうてい間に合わない。そうすると午後の六時過ぎまで全く列車はない。やはり帰りはバスになろう。

左に川、右に小丘陵の地形に細長い段々状の田圃が広がっている。その中をダンプカーの行き交う歩道のない道が通っている。ちょうど田植えの真っ盛りであった。九十年ぶりの早魃だと新聞は騒ぎたてているが、この辺には十分の水が供給されているようで、水面が輝いている。もっ

とも、この田植え時期になると、一挙に水がめが空になってしまうのが、米作地帯の宿命で、足りないとなると余計に確保するような現象も発生しているのかも知れない。

そういえば絶えて日本では田植えを見ていない。田植機とはこんなに簡単にこんな威力のあるものだったのか。この農業革命によって韓国も大幅に労働人口を工業化に振り向けることができて、急速な先進国化に成功したのであろう。働き手がみんな都会に出ていったのも日本と変るまい。だから休日こそ稼ぎ時で、若者も多く混じっている。その中で、おばあさん達が手植えをしている。

そうなのである。韓国は先進国でもあり後進国でもあるのだ。道路にござを敷いて日ながら手作りの野菜を並べて売っているアジュモニたちの商売は、どう考えても人件費も商品もただでないと成立しない。それでも彼女たちはたいてい携帯電話をもっている。このアンバランスが韓国を象徴している。

道路沿いの山裾には巨岩が露出している。韓国では山や溪谷に入ると巨岩だらけで、山と言えば全て岩で出来ているかのようである。それがこの近辺では山裾まで広がっていて、まるで巨大な岩盤の上に表層だけ一皮土を被っている状態である。これでは大きな木が育つはずがない。すこし根を張れば、岩に突き当たってしまうからである。それでも根はたくましく伸びている。

だから、韓国の寺院の木材が貧弱なのは、何も秀吉のせいばかりでもなさそうだ。このような地質地形では振れた木でも大切に活用しないと建物を造ることができないのであろう。それにし

でも、これだけ豊富な石材があるのに、なぜヨーロッパのように石の文化が成立しなかったのであろうか。岩質に問題でもあるのであろうか。寡聞にしてこのようなことをともに議論しているのを知らない。もつとも、古代韓国では城壁造りに素晴らしい築石文化をもっていたし、現代の韓国はコンクリートとレンガと石で町が成り立っている。

一時間ほど歩くと、多率寺の参道入り口に至る。ここから右折して多率寺入り口まで二十分ほどかかる。

途中、珍しく漢字で「鳳鳴山多率寺参道」と書かれた石柱があった。乙巳年とあるから、一九〇五年であらうか、あるいはもつと古いものかも知れない。ただ、多率寺の山号は他の本では方丈山となっている。何か事情があるのだろうか、ひとり歩きでは確かめようがない。

それにしても、韓国の漢字廃止は徹底している。ワールドカップを前に、英語と漢字で併記する動きはあるが、今はどこを歩いていても、ハングルしか見かけない。参道に入ってから、ハングルでいろいろと書いてあるが、それが南妙法蓮華経であったり、南無阿弥陀仏だったりするので奇妙な感じがする。

多率寺の門から、伽藍までは六百米くらいある。他の寺院と同じく、溪谷沿いに木々のトンネルが続いている。見あげると、木の葉が光を通して柔らかな緑に輝き、それが風にそよいで、時に裏面を白く反射させている。

その光のゆらぎの中で、突然、精神を病んでいま病院にいる弟のことを思い出す。幼い彼を連れて、鎌倉の森を歩いた日にもこんな光を見たことがあった。

ひと回り以上も違う弟は、有名私大を出て、大手商社に入り、美人の妻を娶り、愛らしい息子にもめぐまれ、傍目には順調そのものであった。しかしそれが重荷になった。いつも人の目を意識して、仕事の上では上司や同僚から咎められることを極度に嫌った。だから、与えられた仕事は、必要以上に完璧に行って、自己満足していた。

しかしそれでは、仕事がさばるはずがない。地位が上がれば上がるほど、毎日の雑事をさばくのが仕事になるのに、さばけなければ自然と置きざりにされてしまう。同僚たちから遅れはじめた。

それを本人は、学歴のせいだと勘違いしていた。有名私大出身とは言え、まわりにはもつと有力校出身者がうようよいいた。劣等感に苛まれるようになり、野球をやめ、ゴルフをやめ、友達付き合いを絶ち、ひたすら仕事と妻と子供に心を集中し、将来に備えるため、異常なほどにお金に執着しはじめた。

やがてお金や妻や子供に対する過大な関心は、ひとり相撲となり、ちよつとしたことにでも怒りを爆発させるようになっていった。愛する妻や子との間に溝がひろがった。そしてリストラの季節を迎えた。

大手商社では、社員の一生を面倒みる仕組みが出来上がっていた。弟はその仕組みを信じよう

としていた。しかし時代の流れはもつと速く激しかった。さすがに既得権をそのまま無にはしなかったが、時間を切つて、それまでに退職すれば旧制度の恩恵を受けられると迫られた。力の有る者と力の無い者から去つていった。その中に弟もいた。

退職がきっかけであつた。愛する妻が去つていった。最初はお金の威力で引きとめようとした。しかしそれが足かせになつて、結局は退職金まで与えて別れることになつてしまつた。親からの遺産と会社からの年金程度は残つたが、再就職もままならず、孤独と将来への不安の中で、精神に異常をきたした。

弟にはしばしば海外旅行を勧めていた。異文化に触れると、いままで拘つていたことが小さく見えることがあるし、まして貨幣価値の異なる国に行けば、お金の心配も和らぐであろう。それには、ポルトガルやスペインが良い。いやタイの方が暮らし易いとも聞く。

ああ、そうだ。弟を韓国に連れてきて、一緒に生活してみたらどうだろうか。その時は「こうして、ああして」と思いが駆け巡る。

参道が行き止まりになつたところに駐車場があり、そこから階段を上ると、傾斜地に伽藍が広がっていた。大雄殿（本堂）らしい位置に寂滅宝宮と額の掲げられたお堂がある。ハングルで「佛紀二五四五年」「舍利塔重修佛事百日祈禱道場」と垂れ幕が出ている。韓国ではどこでも垂れ幕の洪水であるが、寺院も例外ではない。参詣者には女性が多いようである。堂内でさかんに

立伏礼を行っている。

普通なら本尊の安置されるべき場所には何もなく、その後ろに大きな嵌め殺しのガラスがあり、それを通して裏にある舍利塔が望める。最初は巨大な鏡かと思ったが、ガラスを通してかすかに歪んだ舍利塔が、暗い堂内を額縁に見立てて浮き上がっている。平等院鳳凰堂や奈良浄瑠璃寺では、尊佛のお顔を小さな覗き穴を通して池に写して拝する趣向があるが、それに比べたら何と大らか趣向であろうか。説明によると、やはりここはもと大雄殿であったが、一九七八年に、弥勒菩薩画から舍利百八骨が発見されたため、それを舍利塔を作って安置して、こちらを拝札殿に改称したものらしい。

寂滅宝宮のまわりには、応真殿（羅漢殿）や極楽殿がある。こちらの方が由緒ある建物らしくハンブルと英文の案内板が立っている。いずれも似たようなことが書かれていて、新羅智詮王四年（五〇三）に縁起祖師がここに麗岳寺を創設したが、善徳女王五年（六三六）にこれらの二堂を建て多率寺と改称したという。これも例にもれず、壬辰倭乱で完全に焼失し廃墟に化したとある。

そんな説明文を読んでいるところに携帯電話のベルが鳴った。一応「ヨボセヨ」と応えるが、妻からの電話であった。妙子のところに予定通り男の子が生まれたという。初孫である。気分が高まり息せき切って質問するが、どうもこちらの声が聞えていないらしい。そういえば、山地や人里を離れると、携帯電話が繋がらなくなるという。電波中継所が近くにないと、使えなくなる

タイプらしい。そうこうしているうちに結局切れてしまった。こちらから架け直したり、向こうからの電話を待ったりしたが、状況はますます悪くなるばかり。とにかく、無事出産したらしいので、あわてることもあるまい。

しかし、もうゆっくり境内を見学している気にもなれない。新聞の切抜きによれば、多率寺は、日本の統治下にあつて、反日抗争の拠点となっていた。一世を風靡した思想家や詩人、小説家、画家それに政治家たちが、三国史の憂国志士の如く、集まっていたという。そんな面影を探してみようと思ったがやはり落ち着かない。

売店に立ち寄って、茶器を見る。茶の歴史では由緒ある寺らしく、味わいあるものが無造作に置かれているが、買うのは妻と一緒にした方が無難である。資料を読んで見るが言葉が難しくよく判らない。おおよその意味は、ここの茶は竹向茶といって、油っ気のないお寺の食事にあわせて、胃の負担にならないよう、竹を使用して作った香り高くソフトなものということらしい。後で思えば、初孫の誕生に合わせて何でも良いから買っておけば良かったと思う。

多率寺の門まで戻ると、休憩所があった。まだお昼にはちょっと早かったが、とりあえずひとりで乾杯をすることにした。電話はまだ通じない。

ビールと軽い食事をとって外にでると、心地よくふらつく。暑い日差しであった。

そういえば、妙子の生まれた日もこんな日差しであった。たまたま日曜日で子供達をふたり連れて妻の実家に出かけたところであった。実家に着くと、前置胎盤で異常出血があり、国立相模原病院に緊急入院したとの連絡が入っていた。

様子が全くわからない。とにかく病院に急行しなければならない。車よりも電車とタクシーの乗り継ぎが早いと考えて田園都市線で長津田に向った。そこまでは順調であったが、長津田には一台もタクシーがいなかった。子供は駄目かも知れない。妻はどうしているだろうか。

十分、十五分、二十分。まだ来ない。もし電車が来たら隣の町田駅まで行った方が早いだろうか。いや、もう少し待てば来るに違いない。三十分、四十分、まだ来ない。七月の初めだと言うのに、真夏の日差しであった。駅前は死んだように暑く静かであった。

やっこの思いで相模原病院に到着した。受付に駆けつけると白帽の看護婦さんがこちらを振り向いた。たまたま妻の帝王切開手術を終えて、いま休憩中の看護婦さんだという。帝王切開で生まれた胎児は、酸素が欠乏して蒼白だったそうだ。危ないところだったという。

美しい人であった。白い帽子が良く似合っていた。絶対にこの顔は忘れまい。

その妙子が男の子を産んだという。異常がなければそれで十分だ。いや異常があったって良いではないか。

参道入り口の国道まででると、あいかわらずダンプが往き来していた。やっとな電話が通じた。今度は大丈夫だ。予定日より一週間近く早く生まれて、体重は二八五〇グラム。お父さんに似

ていたらどうしようと心配していた妙子、相手側に似ていて一安心しているらしい。苦笑する。

さて、バス停を探そう。もっとも今日は歩くための外出だ。この前の土曜日には、登山好きの教授や学生達と智異山に登って来た。韓国ではもっとも険しい山で九時間かかった。日曜日には、慶州まで遠出して、主要な遺跡を歩きまわり、ついには念願の南山新城跡にも登ってきた。一日平均一万五千歩を目指しているが、今月に入ってから、平均二万歩を超えるペースだ。今日もできるだけ歩こう。そのため、バス停のある駅の方とは逆の方向に向かって歩き出す。

家並みが途絶えて久しくなつたところ、突然、高層アパート群が目に入った。韓国はどこに行つても高層アパートばかりだ。こんな田舎にまで、高層住宅を建てるとは何たることか。

近づくと、それは韓国軍八二六五部隊の宿舎であつた。顕忠日は、国のために命を捧げた人たちを偲ぶ日、軍隊に休日があるのかどうか知らないが、迷彩服の守衛兵が、不動の姿勢で立っている前で、私服の青年たちが何か談笑していた。垂れ幕には、天下無敵白虎隊とある。ここだけは漢字で書いてある。そうでないと感じがでないのかも知れない。白虎隊。どこかで聞いたような気もする。

道は、南海高速道路がすぐ近くに見えるところで町に入った。町といつても道路沿いにいくつか商店が連なっているだけである。バス停が町並みのはずれにあつた。しかし、もう少し歩きた

い。

歩いていると車が止まってくれる。乗って行けと言う。もつとも、自動車道路を歩いているものなど皆無である。韓国ならヒッチハイクは容易であろう。まして、道路が山間部に入ると、次の停留所まで三十分以上もかかってしまい、当てにしていたバスも行過ぎてしまった。

また、弟のことを想った。彼はいつも「もし……」「もしも……」と仮定の心配ばかりするようになっていた。大手商社に勤めていることを誇り、美人の妻を勲章とし、いつも自分よりも上ばかり見て生活し、そうでない人達を見下している風さえあったことへの反動であろうか、とにかく脱落するのを恐れていた。

世の中には、恵まれない人たちがはるかに多いのだといくら言っても、けっして耳を貸さなかった。事実、今でも弟はまだ恵まれているし、これからの人生も閉ざされてはいない。そこから抜け出すには、早く落ちるところまで落ちなければだめだというのが、妻と私の意見であった。底を見たことのない弱さなのだ。

私たちには武という知的障害を負った子がいる。この子が果たして、ひとりでバスに乗れるようになれる日が来るであろうか。それが、初めて異常に気づいた時の想いであった。

その武が今では、社会福祉法人の工場でお給料を貰って働いている。とても他人との比較にはならないが、以前の彼と比較すれば、確実に一歩ずつ進んでいる。その進歩を見つける度に、私

たちふたりは喜び合ってきた。武のお陰で、私たちはより深く人生を味わえたとも思っている。将来に不安がないかといえ、そんなことはないが、弟などには、この気持が全く分らないのであろう。恵まれすぎていると人の心が分らず、恵まれないと人生を深く味わえる。人生とはそんなものであろうか。

だから、初孫に何かあっても、妙子は強く生きて行けるはずだ。

やつとバスに乗る気になった。田舎のバスに乗って、また思い出した。

日本語もおぼつかない武がなんとか公立の中学校に入れてもらえた時のことであった。英語の授業が始まった。せめて、読み方だけでもと思い、毎朝一時間、武と一緒に英語の教科書を読み続けた。その中に「黄色いハンカチ」という物語があった。

刑を終えて、バスで故郷に向う男がいた。もし妻子が迎えてくれるなら、バス停の榎の木に黄色いハンカチを掲げて欲しいと手紙を送った。ハンカチが出ていなければ、そのまま通り過ぎる。そんな不安の中で男が見たのは、榎の木いっぱい結ばれた黄色いハンカチの群であった。

毎朝、おなじところを読みながら、同じように感動した。そして武がはじめて普通の生徒なみの成績を得たのが英語であった。

その武と離れていま韓国に來ている。大学の金属系招聘教授という立場は作ってもらっているが、いわば趣味の歴史と考古学のためである。武のために、こんなことをしてはたして良い

のだろうか。

しかし、武がまた少し成長したという。それを知らせてくれる妻とは心が通う。そうだ。この次は、妻と一緒に多率寺に来よう。やはり茶器は買わなくて良かった。

結局この日は、二十五キロ近く歩いた。宿舎のアパートではまた乾杯が待っている。そして今日一日が終わる。

いつかきつと、これを読んでくれるかも知れない初孫を想いながら。